

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第489号 平成25年2月7日

花のありか

年毎に 春を知りてや梅桜

木を割りて見よ 花のありかを

新渡戸稲造氏は「武士道」「農業本論」はじめ数々の著書を世に送り出していますが、その中の1冊に「一日一言」という本があります。この本は、大正3年7月、岩手県内でバスの事故に遭遇して大けがを負い、岩手病院に入院中に「1日にひとつの文章を読むことで修養を高める事が出来ないか」と想を練り纏められたものです。私のような凡人ならば、怪我で入院となればこれ幸いに何も考えず、ぼーっとしているところでしょうが、流石に新渡戸稲造氏ともなれば一日たりとも無駄にはしないという事でしょう、頭が下がります。

さて冒頭の一首は、今紹介した「一日一言」の中に搭載されているもので、前置きに次の一文が付記されています。

「すべて世の中の事は顕われぬところに力の源泉がある。船の走るのも底に備えてある汽鐘(きかん)のおかげ。人の五臓も表には見えぬ。

英雄の力も内助による事多い。目に立つ桜は春一時(ひととき)の栄、地の下の根は冬来たりても死なぬ。」

我々はとかく目に見える現象にとらわれ、右往左往する事が多いのではないのでしょうか。目に見える事だけが真実とは限らないのに、つい目の前にある事にとらわれて対処療法で済ませてしまう事が多い様に感じて、反省しています。

冒頭の一首は、「物事の本質を見よ」という事なのだと思います。目に見える形に囚われれば、そのよって立つ本質を見失う事にもなりかねません。

桜の花が毎年決まって春に咲くのも、そこには様々な仕組みや力が働き、機能しているからで、木を割って見たからといって花の本質が見つかる訳ではありません。以前、サン・テグジュペリの有名な「肝心な事は目には見えない」という言葉を紹介しましたが、相通じるものがありますね。

新渡戸稲造氏は、文久2年(1862年)に岩手県盛岡市に生まれました。長じてのち、札幌に農学校が設立された事を知ると内村鑑三氏らと共に第2期生として入学します。

新渡戸氏は在学中にキリスト教と出会いますが、これが彼のその後の人生に大き

な影響を与える事になります。

「太平洋のかけ橋になりたい」

新渡戸氏は、東京帝国大学に入学した時、教授にこう抱負を述べたといひます。西洋思想と東洋思想の融合こそ、彼が目指したものだと思ひます。

国際間の利害が錯綜しますます厳しさが増す中で、我々の眼前には武力によって意を通そうとする姿ばかりが目につきます。しかし、こういう時だからこそ我々は冷静に振る舞い、相互の文化の交流を更に深くし、人と人との信頼関係を築く努力をすべきだと、新渡戸稲造氏ならきっとそう語ってくれるに違ひありません。

蛇足ながら、新渡戸稲造氏の歌をもう1首紹介しましょう。

咲く花を 歌に詠む人誉むる人

咲かせる花の 元を知れかし

我々は、日々の出来事に心をとらわれて年月を送っていますが、折々は心沈めて造花の妙、造物の法に想いをいたせば、人生の喜悦は一入深まる事でしょう（「一日一言」から）。（塾頭：吉田 洋一）